47年間川崎学園とともに～ノーベル賞受賞者との遭遇，入寮，折田洋造先生との出会いから定年退任を迎えて，母の関わり～

秋定　健

川崎医科大学総合医療センター耳鼻咽喉・頭頸部外科学

（令和６年３月６日受理）

１．プロローグ～入寮～

1977年（昭和52年）４月初めだったでしょうか。18歳になって間もない僕は，女性の運転手がそれほど多くなかった時代，母と叔母の交替制というとんでもなく恐ろしい運転で，トヨタカローラに乗せられ，山口県新南陽市（現：周南市）から10時間以上かけて（当時山陽自動車道はありません。）岡山県倉敷市にやって来ました。現在のようなネット情報もない時代です。来てみてびっくり，倉敷市といっても人里離れたまさに山奥『生坂』の地に・・・周囲に何もない環境に愕然としたことを覚えています（当時は生坂寮で２年間生活しました）。束縛されるのが大嫌いな僕は寮生活だけは絶対にしたくなかったのですが，母にとって山口大学での恩師である柴田進病院長，病理学教授の山下貢司先生がいらっしゃる川崎医科大学を強く勧められ，入学を決めた経緯があります。今だからお話しますが，寮生活中にいつの間にかカローラが手元にあったのはなぜでしょう？親心？（自家用車を持ってはいけない寮の規則）なのでしょうか。47年後の現在，定年を迎えてまたカローラ（スポーツ）に乗っています，これもまた不思議です。

２．短大女子寮侵入未遂事件

母が耳鼻咽喉科医院を開業しており，中学生までは優等生風に学級委員長など務めていましたが，やはり根っこはやんちゃ坊主です。両親の離婚，ほったらかし教育，家の賃貸部屋でのカップル騒動，悪友の存在，常に自分の部屋で猫を飼う習慣など・・朝帰りもしょっちゅうの高校時代はかなり荒れた生活でした。生坂寮でもその延長でしょうか，スクールバスに乗ってまじめに学校に行くことが性に合わなかったのでしょうか・・そして２年生の冬，成人の日深夜に事件は起こりました。今でいう『短大女子寮侵入未遂事件』です。侵入しようなんて全く考えていなかったのですが・・舎監さんの通報で，運悪く偶然山幸（現在の瀬戸大橋温泉）付近をパトロールしていた警察官がすぐに現れ，サーチライトで照らされて『逃げると撃つぞ！』，ところが逃げ切った私は，凍りつくような午前１時ごろでしょうか。パジャマにガウン，裸足で鳥小屋に隠れており，早朝に寮まで歩いて帰りました。詳細はさておき２週間の停学が待っていました。お酒の件を咎められた懲罰委員会で水野祥太郎学長に『退学か，断酒か，２つに１つだ！』・・翌日からお酒を飲んでいました。寮に２週間謹慎し，毎日反省文を書いていました。そのほかの事件で始末書，顛末書など幾枚も執筆させていただきました。

退寮37年後，１学年担当・舎監長を拝命しました。寮生の気持ちが大変よく理解でき，むしろ理解しすぎでしょうか，舎監さんとも多くの議論をしました。あの時の学生さんが医師とし

Kawasaki Ikaishi Arts & Sci（50）：13－18（2024）
Correspondence to Takeshi AKISADA, Department of Otolaryngology/head and neck surgery, Kawasaki Medical School General Medical Center, 2-6-1 Nakasange, Kita-ku, Okayama, 700-8505, Japan
Phone：81 86 225 2111
ＦＡＸ：81 86 232 8343
E-mail：akisada@med.kawasaki-m.ac.jp

て立派に活躍している姿は，大変誇らしく感じるこの頃です。

３．数学再試験

寮生活では多くの友人ができました。夜中にこそこそ活動するので３人の仲間は『ゴキブリ軍団』と呼ばれ，僕自身はネズミの『チューちゃん』と呼ばれ，いまだに同級生は『チュー』『チュルルン』などと呼んでくれます。授業に熱心には出席せず，いつもリミットオーバーに気をつけながら，麻雀・パチンコ・合コンなどに大変熱心だったのですが，試験前は鬼のように集中したことを覚えています。おかげさまで再試験になったのは２年生時の数学のみです。数学はコンピューターのプログラムで，全く理解不能で再試験の手応えもなく，まさか数学１教科で留年！も考えました。当時の数学の教授は假谷太一先生で，現耳鼻咽喉・頭頸部外科特任教授の假谷　伸先生のお父様です。再試験の結果が大変不安で，直接先生のところへ参りましたところ，少しの沈黙の後『まあいいでしょう。』・・・もう失神しそうなぐらいの緊張感でした。現在はとても考えられない良き時代です。

４．折田洋造先生との出会い，長年のご指導，そしてお別れ

折田洋造先生に初めてお会いしたのは，大学４年生の耳鼻咽喉科講義の後でした。母が耳鼻咽喉科医で折田先生を存じ上げており，先生からお声をかけていただいたと思います。私は山口県宇部市（大学病院）で生まれ，その後都濃郡南陽町（新南陽市を経て現：周南市）に移りました。その時，祖母の実家が南陽町で引っ越したのだと思っていましたが，実は母の仕事の関係だったのです。このことが折田先生との出会いに繋がっていました。

昭和40年頃と思われますが，岡山大学耳鼻咽喉科学教室ご所属の折田先生は，当時の岡大関連病院の最西端，南陽町の南陽病院に出向されておられ，おそらく１年で大学に戻られた後です，後任としてなぜか山口大学出身の母が南陽病院に勤めたのです。そのことを折田先生もご存じだったようです。不思議なご縁です。

試験期間中に校舎棟で先生にお会いすると，いつも小走り（大走り？）ですれ違いざまに“どお！”とお声がけしていただけます。先生は大変お忙しいご様子で，立ち止まられないので，こちらも追随しながら“まあまあです。”と失礼な返事をすると，先生は高速で後退りされながら“まあまあね！”と右手でゼスチャー✋をされて，去られます。６年生になっても，“まあまあです”を繰り返していましたが，折田先生はお怒りになられるご様子もなく“やっぱりね”という表情からニコニコっとされて，“まあまあね！”と右手でゼスチャー✋よろしく風のように立ち去られます。そのころ実は耳鼻咽喉科医になるつもりはほとんどなく，小児科，神経内科，整形外科などを考えていたわけですが，そんなやり取りを繰り返しているうちに「これはやっぱり耳鼻咽喉科に入るしかないかな。」と思い始めました，そして現在に至ります。卒業前に耳鼻咽喉科志望と届けを出すまで，折田先生は入局のお話を一切されませんでした。今となっては謎ですが，わずかな私の心の動揺・表情などから“彼は入らないのでは”と天才的な鋭い勘が働き，お声をかけていただいたのではないかと思っています。

昭和58年に私を含め４人が入局当時，カンファレンスでの集合写真を見つけました（写真１）。折田先生はおそらく50歳の時です，お若いですね，私もスリムです。それまで５人で運営されていた医局に４人が入ったわけですから，“上を下への大騒ぎ”で，大変お喜びになられていました。

当時の初期研修医は耳鼻咽喉科医局に所属

図１

し，２年間に麻酔科を６か月間，救急科を３か月間ローテーションしていました。麻酔科での研修が大変面白く感じられ，麻酔科に移ろうかな？なんて考えていた時です。私は折田先生執刀手術の全身麻酔担当です，いきなり“あんた，楽しそうじゃねえ！帰ってこんのじゃないかね？”・・・『図星です！』完全に見透かされていました。結局ローテーション通り研修し，その後３年目から大学院でハムスター・ネコ・サルの内耳研究をご指導いただき，学位も取得し今日に至ります。

先生の鋭い直感は患者さんの診察場面でも発揮されます。“あのクランケはこうだと思う”とおっしゃって，その通りだったときは“やっぱりね，思った通りだよ”を連呼されていました。朝早くから回診されて，何か異常を感じられると“あの患者さんはどうかね”とお尋ねです。慌てて診察して対応することもしばしばありました。わずかな患者さんの眼や表情の変化を見逃されません。

先生の天才たる所以は直感力ばかりではありません。手術は目にも留まらぬ速さです。口蓋扁桃摘出術は両側で10分です。鼻の Denker-和辻は助手をなさりながら指導に徹しておられましたが，ご自身でなさったらおそらく一側20分以内だと思います。喉頭全摘出術も縦１本の切開で，助手からは見えない視野から突然“取れたよ”とおっしゃって，１時間程度で見事に喉頭が摘出されていました。“後が辛気臭いね”とおっしゃりながら咽頭縫合されていましたが，瘻孔形成は一度もありませんでした。意味は異なりますが『天網恢恢疎にして漏らさず』でしょう，ごまかしが決して通用しない教授でした。

大の野球好き，カープファンで，ダジャレをお好みで，それでいてダンディな先生です。退任なさってもそんなイメージを持ち続けていた二十数年間でした。そんな折，齢を重ねられ総合医療センターへ入院されました。何かのご縁でしょうか，耳鼻咽喉科も所属の病棟です。詰所前でお会いすると“朝はようから（早くから）頑張っとるねえ”とお褒めの言葉です。いつまでたっても緊張するのでしょうか，入局してからずっとそうだったように“はあ”としかお答えできないままでした。思えば出会いで“まあまあです”お別れ際に“はあ”と失礼な返事ばかりでした。今になって反省しております。大変遅くなりましたが『折田先生のご指導の賜物です。本当にありがとうございました。』どうして今まで言えなかったのでしょうか。本当にお疲れ様でした。心から感謝申し上げるとともに，謹んで哀悼の意を表します。安らかにお眠りください。

５．定年を迎えて

いつの間にか時を経て，自分自身の学園での立場，総合医療センターでの任務も重くなりました。毎日の外来，病棟，手術業務に学園の会議，院内の委員会・打ち合わせ，講演会，研究会，論文執筆・査読，医師会業務・・・学会出席はなかなか困難になりました。東奔西走，八面六臂，獅子奮迅とはこのことか？と勘違いするぐらいです。そして子供や孫に恵まれ，毎年のように訪れる行事に楽しく振り回されているうちに定年の年を迎えました。研究はさてお

き，外来，入院，手術に関しては紹介患者さんをお断りしないのがモットーで，がむしゃらに診療を続け，大変多くの患者さんに受診していただき，また大変多くのクリニックの先生方に患者さんをご紹介いただきました。その結果，毎日の外来は６～７時間に及び，手術は２か月待ちです。

後任の先生方に大勢の患者さんを託すのは申し訳なく，外来で患者さんに『実は私は来年３月で定年なのです。どうされますか？お近くに紹介しましょうか？担当が変わりますが当院に通院されますか？』何度繰り返したでしょうか。近隣の耳鼻咽喉科クリニックに多くの患者さんを逆紹介しました。ところが『先生はどこへ行かれるんですか？』とお尋ねの際は，『妻が倉敷市茶屋町で秋定クリニックを開業しており，来年４月から私が診療します，よかったら紹介しますよ。』となりました。そのうち住所を確認して『倉敷市茶屋町の秋定クリニックに来られませんか？』となり，逆紹介患者さんの山となりました。

秋定クリニックに専念もと考えていましたが，家内が開業している秋定クリニックの事情を考慮していただき，クリニックが休診の火曜日午後と木曜日午後の外来，および木曜日午前は，医療福祉大の講義または手術をさせていただくこととなりました。患者さんに『火曜日と木曜日午後はここでします。』となりました。すでに予約が埋まってきました。

６．ノーベル賞受賞者との遭遇，喉頭がん患者さんとの出会い

免疫チェックポイント阻害薬のニボルマブ（オプジーボ），ペンブロリズマブ（キイトルーダ）開発の基礎となった免疫チェックポイント阻害因子を発見されたノーベル生理学・医学賞受賞者，本庶佑先生は大変ご高名ですが，佑先生のお父様，本庶正一先生は，富山市出身で岡山医科大学を卒業され，その後山口大学医学部耳鼻咽喉科学教授としてご活躍されました，最初に記述したように母親は山口大学医学部耳鼻咽喉科学教室に所属しており，大変ワンマンな（母曰く）本庶教授の薫陶を受けたわけです。私が山口大学医学部附属病院で生を受け，母は育児しながらの大学病院勤務はとても大変だったと思われます（写真２）。乳飲み子の私を連れて本庶教授の奥様，柳さんを頼って本庶宅にお邪魔したようです。柳さんは大変お優しいい方で秋定一家の面倒を見てくださったそうです。

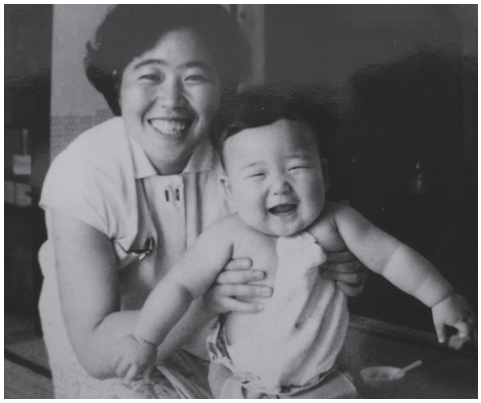

図２

私が生まれた昭和34年１月，かつての本庶佑君は宇部高校２年生です。身長も高くイケメンでモテモテ，天才的頭脳で担任先生の代わりができたとのうわさです。そして私はなんと高校生の佑君（後のノーベル賞受賞者ですよ）に，光栄なことに抱っこしていただいたそうです。きっとご利益があったのでしょう。

さて話は変わって，当院で診察していたある男性患者さんです。急性喉頭蓋炎で入院治療後も腫脹が残存し，喉頭蓋炎の慢性化のように考えていました。あるいは喉頭蓋嚢胞がベースにあるのではと。経過を見ているうちに喉頭蓋の腫脹のため急激な呼吸困難で救急搬送，緊急気管切開後に生検したところ癌細胞が見つか

りました。喉頭蓋に発生した喉頭がんです。放射線化学療法後も再発し，手術も困難となっていました。患者さんは『ずっと診てもらっているのに治らないのですか？』大変ご不安な様子です。そんな折，ニボルマブが耳鼻咽喉科・頭頸部外科でも適応が拡大されておりました，まだまだデータは少なく，効果は使ってみないと判りません。半信半疑で使用しました。なんとそれが著効したのです！徐々に腫瘍は消失しました。気管孔も閉鎖し発声も十分可能です。65年前の出会いからです。こんな不思議なご縁があるのですね。ニボルマブで救命できた患者さん，大変元気になられましたよ，本庶佑先生！

７．認知症の母

たびたび登場します母親（２月で89歳）です。孫の結婚式に呼ばなかったといって誤解があり（本人がやっぱりやめておくと言ったのは間違いないのですが・・・私はそのころから認知症が始まっていたと思っています。），疎遠になった10年近くは，年に数回の電話しかしておりませんでした。山口県下松市に住んでおり，その間２～３回会ったでしょうか。2022年11月に貧血症状と嘔吐で周南記念病院に救急搬送後，大腸がんによるイレウスと診断され，猶本病院長もご存じの同病院外科部長に早急に手術をしていただき，回復した後，猶本病院長，山辻外科部長のご配慮で川崎医科大学総合医療センターに転院させていただきました。今回は二人の弟が山陽自動車道を使い５時間程度で搬送しました。新たに見つかった肺癌に対する放射線治療後，退院させていただき岡山市内のサービス付き高齢者用住宅に入居しました。束縛されるのが大嫌いな母（私の性格も DNA ですね。）はどうしても一人暮らしがしたいとの希望で退居し，３か月間マンション住まいをしました。その結果，栄養状態，認知症が悪化し再度総合医療センターに入院後，９月に新規オープンの高齢者医療センターで２週間お世話になった後，サービス付き高齢者用住宅に再入居しました。さてさて毎日50回を超える電話です。同じことばかり聞いてきますが，やはりここを出たいというのです。一人で住める，山口に帰りたいというのです。～ to be continued ～　定年退任で，学園にも貢献しながら妻のクリニックを中心に仕事を続け，少し余裕ができたら年老いた母の面倒も見ていくのかな。そんな風に考える12月終わりの寒い日でした。

図３

８．エピローグ～高校同窓会～

年が明けて１月２日に，母校の山口県立徳山高校同窓会に久しぶりに出席しました。『65という歳は，企業などで再雇用になっていても真の定年の年です，秋定君定年でしょう？ぜひ来ませんか？』と連絡をいただいての参加です。25歳ごろ出席して以来40年ぶりの再会です。自分の学年は全部で10組の450人でそのうち64名が参加です。お互いに『お前・君・あなた，誰？』の状態です。しかし話してみると，風貌は大きく変わって～かつてのマドンナも黒柳徹子さん状態～いても，根っこ（性分）は高校生時代のままです。リアルなのですがタイムスリップ感満載です。たとえば純粋な男は純なまま，仕切る男は仕切る，いじめっ子ジャイアンはおじいちゃんジャイアンです。最高に楽しい１日で，大いにエネルギーをいただいて帰りました（写真３）。一つ自慢話をします。２次会はカラオケ『まねきねこ』での競演でしたが，パフォーマンス度は川崎学園で長年鍛えた私が自他ともに認める No1でした。翌日の LINE でも『秋定君の聖飢魔Ⅱ“蝋人形の館”，最高！』お後がよろしいようで・・・

さあそろそろ最終講義の準備に入ります。学術的な講義はもちろん，本論文の内容満載でお話ししようと思っています。ご期待ください。